

○曾根 悦子<sup>1</sup>, 喜熨斗 智也<sup>2</sup>,  
田中 翔大<sup>3</sup>, 月ヶ瀬 恭子<sup>3</sup>, 上  
杉 純平<sup>3</sup>, 原 貴大<sup>1</sup>, 坂梨 秀  
地<sup>1</sup>, 武田 唯<sup>2</sup>, 井上 拓訓<sup>1</sup>,  
田中 秀治<sup>1,2,3</sup>

<sup>1</sup>国士舘大学大学院 救急システム  
研究科, <sup>2</sup>国士舘大学 体育学  
部 スポーツ医科学科, <sup>3</sup>国士舘  
大学 防災・救急救助総合研究  
所

【背景】2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックにおいて、現状の消防組織の救急医療体制では増加する外国人に十分な対応ができるかが問題となっている。そこで観客を含めた各会場の救急体制の整備はメディカルサポートボランティア体制整備が急務である。【目的】FAの現状の問題点を抽出し、FA育成プログラム内容を検討する。【方法】本学運動部に所属する大学生72名を対象に、救急要請の判断、各応急手当実施に際する自信の有無についてアンケート調査を実施した。【結果】救急要請の判断や各症状に対して応急手当を実施することについて、80%以上の学生が「経験がない」「知識がない」等の理由で判断・実施する自信がないと回答をした。【考察】心肺停止傷病者のみならず、現場に居合わせた救助者が観察しそれに伴う応急手当を実施するためにはトレーニングが重要であり、知識や経験を積み継続した育成プログラムを構築することが重要であると考える。【結語】オリンピック・パラリンピックの会場で救急隊をただ待つだけでなく、現場で適切な応急手当を行うことで、「安全な国 日本」を世界に発信することができると思う。

○石田 妙美<sup>1</sup>, 野口 宏<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東海学園大学 教育学部

【目的】児童生徒の救急処置を担う養護教諭の養成において、救急処置能力を向上させる教育は不可欠である。特に心肺蘇生法は重要なものであるが、獲得したスキルは時間経過とともに低下する。ここでは講義受講1年後の胸骨圧迫のスキルを把握することを目的とした。【方法】蘇生法講義受講1年後に、蘇生訓練人形レザシアンQCPRを用いて2分間の胸骨圧迫を実施させた。調査協力の得られた19名を分析対象とし、受講後救急講習に出た回数、蘇生訓練人形に触れた回数別に比較検討した。【結果】胸骨圧迫の深さ(平均)は、受講前 $4.0 \pm 1.1$ cm, 受講後 $5.0 \pm 0.6$ cm, 1年後 $5.5 \pm 0.5$ cmといずれも有意に( $p < 0.01$ )強く圧迫していた。1年間に3回以上訓練人形に触れた者(9名)のリコイル率は99.7%と他の者(89.0%)に比し有意に( $p < 0.05$ )高かった。2回以上講習に参加した者(12名)のリコイル率も99.6%と他の者(84.6%)に比し有意に( $p < 0.05$ )高かった。【考察】受講後1年間に2回以上の救急講習参加や蘇生訓練人形に3回以上触れることで、胸骨圧迫のスキルを維持できる可能性が示唆された。

○藤田 尚宏<sup>1</sup>, 甘利 香織<sup>2</sup>, 松  
本 康<sup>2</sup>, 平原 健司<sup>2</sup>

<sup>1</sup>佐賀県医療センター好生館 総合  
教育研修センター, <sup>2</sup>佐賀県医  
療センター好生館 救命救急セン  
ター

当施設は地方の救急中核病院で、時間外のER診療は救命センター医師が救急車に対応し、walk-in患者は総合救急外来(以下、総合)という別の動線で診療。後者は初期臨床研修医と後期研修医～上級医がペアで初診を担当し病態別にICU・SCU・NICU・救急当直が補助する屋根瓦方式を採用。【目的・方法】総合での診療能力を高めるための研修医勉強会のあり方につき検討した。H29年1月から1年間に研修医が診た患者群の動向を電子カルテ等から調査した。研修医勉強会では研修医が自ら経験した興味ある症例の発表を義務付けた。年末に研修医にアンケート調査を実施した。【結果】研修医は30名で平均4回/月の当直頻度。全ER受診患者12437名のうち救急車搬送は2935名、walk-in患者は9502名。後者のうち186名(1.9%)が3次救急。研修医のカルテ記載の承認に遅れあり。研修医自身の経験症例の発表は有意義という意見が多く、筆者が疾患別に冷や汗症例を定期的に提示することで情報共有が得られた。【結語】50名に1名の割合で3次急患が潜んでいる当施設では、研修医勉強会で指導医による講義のみならずERの反省症例の提示が研修医の学習意欲を維持し診療能力を高めていることが推察された。

○木村 由美子<sup>1</sup>, 間中 美和<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>医療法人 豊田会 刈谷豊田総  
合病院

【目的】昨今の救急医療を取り巻く様々な環境や状況により、救急外来で勤務する看護師には強いストレスがかかると言われてきている。しかし、そのような中でもバーンアウトすることなく救急看護を極めようと研鑽する看護師も多くいる。そこで、その原動力となる救急看護の魅力ややりがいにつながる要因を明らかにし、今後の救急看護における看護師教育の一助とする。【方法】A病院の救急外来で常時勤務している看護師を対象に、インタビューガイドを用いてグループインタビューを実施した。得られたデータから逐語録を作成し、文脈に注意しながら、救急看護の魅力ややりがいにつながる要因などの思いが語られたデータを抽出した。抽出したデータはコード化し、段階的に抽象度を上げてサブカテゴリー、カテゴリー化した。【結果】研究協力者は4名。救急看護を続けられる要因について、33のコード、12のサブカテゴリー、4つのカテゴリーが抽出された。【考察】救急外来で勤務する看護師はストレスフルな状況にある。しかし、それを「良いストレス」と捉えることができると、そのストレス自体が救急看護の魅力ややりがいとなり、より良いパフォーマンスにつながる。